

## 「女性と日本文化」の授業評価の検討

園田 麻利子, 牟田 京子

### 要 旨

【目的】「女性と日本文化」の授業の評価を明確にし今後の課題を検討する。

【方法】調査対象者は、A大学看護栄養学部看護学科1年生58名に自己記述式質問紙調査を授業前後で2回実施した。調査項目は、牛ノ濱等が作成した講義「女性と日本文化」の効果測定項目(10項目)に筆者が5項目を追加した15項目、過去の日本文化の経験の有無とその期間、授業に対する自由記述であった。

【結果および考察】調査参加者は52名、回収率89.7%であった。調査項目の授業前後の信頼係数は、 $\alpha = .792, .830$ と高かった。各項目の平均値の授業前後の比較は、調査項目⑦「看護の実習時、言葉遣いなどに役立つと思う」が授業後に低下したが、他の14項目においては授業後が上昇した。15調査項目中の10項目と15項目全体を合計した平均値が有意に授業後が高かった。日本文化の経験者は、装道・華道とも各3名、他の経験者は30名であり、経験の有無による15調査項目に関しての有意差はなかった。また、自由記述においては授業に対して肯定的な記述が多かった。これらの結果より授業の効果は得られたと考える。現在の看護系大学の学士課程にある女子大学生は、他者理解が困難、具体的な体験を抽象化へ導くことが容易ではないことが示唆され、これらを考慮した教育の在り方・目標の検討などの課題が明確となった。

キーワード：女性と日本文化、授業効果、看護系大学の学士課程にある女子学生

### I はじめに

文部科学省の高等教育局医学教育課から全国の看護系大学の学士課程における看護師養成教育において共通して取り組むべき内容を抽出し、各大学のカリキュラム作成の参考として示した「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」が策定され、平成29年10月31日に公表された<sup>1)</sup>。この骨子は、看護系人材として求められる基本的な資質・能力として、プロフェッショナルリズム、看護学の知識と看護実践、根拠に基づいた課題対応能力、コミュニケーション能力、保健・医療・福祉における協働、ケアの質と安全の管理、社会から求められる看護の役割の拡大、科学的探究、生涯にわたって研鑽し続ける姿勢という9項目が明記された。また、各大学においては、本モデル・コア・カリキュラムが提示する学修目標を包含するとともに、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の内容を充足しつつ、特色ある独自のカリキュラムを構築されることが期待される<sup>2)</sup>とも述べている。その背景には看護系大学の急増に伴い、教育水準の維持向上が課題となっており、また、少子高齢化の進展と国家の財政再建に伴い地域包括ケアシステムの構築など社会の変化に対応する看護師として

必要な能力を備えた質の高い人材養成が急務となっていることがあった。今回の公表の経過として厚生労働省は、2002年11月から「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会」を立ち上げ、2010年には、「看護教育の内容と方法に関する検討会」を発足させた。また、文部科学省は、2009年5月から、「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」を発足させ、両省ともにそれまで以上に質の高い看護師を養成する必要性を明言し続けてきた。

そこで、各大学では同検討会の提言を踏まえ、学士課程の中で質の高い看護教育の充実と各大学の特色あるカリキュラムの作成が進められてきたところである<sup>3) 4)</sup>。

そのような中でA大学看護学科は、初年次教育として教養深める学生の育成をめざして創意工夫をしている。平成17年度より1年次の基礎教育科目の人間的成長を促す領域として「女性と日本文化」の中で茶道・装道・華道を学ぶ正規のカリキュラムを立ち上げた。A大学の教育理念は、「カトリック精神に基づく人格教育を行い、有為な人材を育成する」ことであり、建学の精神として「聖母マリアのように神様にも人にも喜ばれる女性の育成」である。これは、イエス・キリストの聖母マリアを理想と仰ぎ、現代に生きる若者が自他の命の尊さを認識し、他者の幸

せのためにという精神をもって行動することを意味している。これは、看護を考えると看護の対象は自分ではなく他者であることと合致しており、他者の健康・安寧という看護の目的をめざす女性の教育がわたしたちに課せられていると言える。

そして、「女性と日本文化」の授業の特徴は、日本の伝統文化をその師範から直接指導を受けながら学び、行為と共にそこに込められた心を感じることである。目標は、一人の人間として生きる過程において、生活をより豊かにし美に対する感性を磨き、礼節を身につけることである。これらの体験が将来看護職の基盤となる教養を深める機会となることである(表1)。学生は、日本の伝統文化である和服の浴衣を自ら着装できるようになり、それを身に付け客を想定しお茶・お菓子をふるまい、それらをいただく体験をする。また、自分で華を生け師範より指導を受け自らが創り上げたものを評価し、他の学生の生けたものを鑑賞する。これらの体験を楽しみつつ伝統文化の一端に触れたことを実感し、授業後には課外活動で学習を継続する学生がいるなど好評を得ている。

上記の取り組みに対して2010年に牛ノ濱らが授業効果を測定する項目の検討<sup>5)</sup>をしているが、その後評価を実施していない。そこで今回、授業の評価を明確にし今後の課題を検討したい。

## II 目的

「女性と日本文化」の授業評価を明確にし今後の課題を検討する。

## III 「女性と日本文化」の教育課程における位置づけ、到達目標・授業の展開計画・評価方法

A大学の教育課程の構造は、基礎教育科目と専門教育科目の2系列で構成されている。

その中で基礎教育科目は、人間的成長を促す領域と情報を活用し表現力を高める領域で構成され、専門教育科目は、看護の基盤となる領域・看護の軸となる領域と実践力を発揮する領域で構成されている。この構造の中での本授業は、1年生の基礎教育科目の人間的成長を促す領域の女性発達学に位置づけられている。到達目標、授業の展開計画・評価方法を表1に示す。

## IV 研究方法

- 1) 調査対象者 :A大学看護栄養学部看護学科1年生 58名
- 2) 研究方法 : 自己記述式質問紙調査
- 3) 調査時期 :  
1回目(後期授業開講時:以降授業前とする):2018年9月26日

表1 「女性と日本文化」の到達目標と授業の展開計画

到達目標	1 一人の人間として生きている過程において、生活をより豊かにできる 2 美に対する感性を磨くと共に礼節を身につけることができる 3 看護職の基盤となる教養を深める機会となったと感ずることができる
授業の展開計画	1回 オリエンテーション、「女性と日本文化」の講義」のねらいや授業計画等の概要説明、日本文化の概説の講義 2・3回 華道(1/2) 華道・池ノ坊に関する日本文化の概要の説明 二人で一つのいけばなを創作・創作した作品の鑑賞 4・5回 華道(3/4) 華道・池ノ坊に関する日本文化の概要の説明 一人でいけばなの創作・創作した作品の鑑賞 6・7回 装道(1/2) 浴衣の名称・着装に必要なもの・たたみ方、半幅帯の結び方 挨拶の仕方、玄関の入り方・履物の揃え方 8・9回 装道(3/4) 浴衣のたたみ方、正しい浴衣の着方と脱ぎ方、浴衣の着装、 半幅帯の結び方、物の受け渡し、襖の開け方・閉め方 10・11回 装道(5/6) 浴衣の着装、半幅帯の結び方、美しい着装のポイント 美しい立ち振る舞い 12・13回 装道(7/8) 浴衣の着装、半幅帯の結び方、お茶の入れ方の実際 14・15回 装道(9/10) まとめ:浴衣の着装し半幅帯の結び、お茶を入れお客様に出す演習 お客様役はお茶・お菓子をいただく演習 玄関の入り方・履物の揃え方、物の受け渡し、襖の開け方 閉め方
評価方法	1 演習の参加状況 50% 2 演習日誌・女性と日本文化をどのように考えるか等の提出物 50%

2 回目（授業終了時の日誌・レポート提出時：以降授業後とする）：2018 年 12 月 21 日～24 日

#### 4) 調査項目：

(1) 2010 年牛ノ濱等が作成した講義「女性と日本文化」の効果測定項目（10 項目）<sup>6)</sup>（講義「女性と日本文化」尺度とする）に筆者が 5 項目を追加し 15 項目について調査した。「女性と日本文化」尺度は、「一般的なマナーを身に付ける大切さ」「礼儀を心がける必要性」「美しさに気づくことによる感性の刺激」「日本文化の楽しさ、美しさを次世代に伝える希望」「視野が広がり人間としての成長」「生活を豊かにすることに有効」「文化継承の大事さ」「実習時の話題や言葉遣いに有効」「看護に必要な相手を尊重する心の学び」「日本文化への無知さの実感」の項目が入っている。今回は、日本文化として直接学んでいる装道・華道について生活との関連・学ぶ意味、国際化との関連性などを追加した。上記尺度は、4 件法であったが、5 件法以上の点数化の検討が考察されていた<sup>7)</sup>ため今回は、1「全く当てはまらない」2「ほとんど当てはまらない」3「どちらかというのと当てはまらない」4「どちらともいえない」5「どちらかというのと当てはまる」6「かなり当てはまる」7「非常に当てはまる」の 7 件法で測定した。

(2) 過去の日本文化（装道・華道、体育系・文化系）の経験の有無とその期間の度数

(3) 授業に対する自由記述

5) 分析方法：SPSS15.0J を使用し、有意水準 5% で有意差ありとし、以下の分析をした。

(1) 授業前後の質問紙調査の信頼係数  $\alpha$

(2) 授業前後の質問紙調査の 15 項目の記述統計

(3) 授業前後の質問紙調査の 15 項目と 15 項目の合計の平均値の授業前後の対応サンプルによる Wilcoxon の符号付き順位検定による比較

(4) 過去の日本文化の経験の有無による 15 項目の合計の平均値の比較

(5) 自由記述

#### 6) 倫理的配慮：

研究対象者に研究の趣旨および方法について説明し、研究参加を断っても成績には一切関係のないこと、研究以外の目的でデータを使用しないこと、得られたデータは個人が特定されないよう配慮する旨を伝えた。参加同意が得られた時は、対象者から同意書に署名をもらった。

## V 結 果

1) 調査参加者は、52 名（有効回答率 89.7%）であった。

2) 信頼係数  $\alpha$  は、授業前  $\alpha = .792$ 、授業後  $\alpha = .830$  と両者とも高い信頼性係数であった。

#### 3) 記述統計

各調査項目の授業前後の平均値と標準偏差を表 2 に示した。授業前の平均値で得点が高かったのは、調査項目②「一般的なマナーを身につけることが大切だと思う」6.63、その標準偏差  $\pm 0.627$ （以降  $\pm$  で表記）であった。次には調査項目⑧「普段の生活の中から礼儀を心がける必要がある」6.42  $\pm 0.723$ 、調査項目⑦「看護の実習時、言葉遣いなどに役立つと思う」6.15  $\pm 0.998$ 、調査項目⑮「国際化に伴い、日本文化を学ぶことは役に立つ」6.06  $\pm 1.056$ 、調査項目⑨「看護に必要な心（相手を尊重する）を学ぶことができる」6.04  $\pm 0.949$  の 5 項目が 6.0 以上を示した。授業後の平均値では、6.0 以下を示したのは調査項目⑩「日本文化について知らなすぎる」5.27  $\pm 1.430$ 、調査項目①「花の美しさを感じて心が豊かになる」5.90  $\pm 0.774$ 、調査項目④「花の美しさや立ち振る舞いの美しさに気づくことができ、感性が刺激される」5.98  $\pm 0.874$  の 3 項目で、他の 12 項目は 6.0 以上を示した。15 項目全てを合計した平均値においては、授業前 5.57  $\pm 0.53$ 、授業後 6.04  $\pm 0.50$  であった。

日本文化（装道・華道）の経験と今回の授業以外での経験の有無、その期間の度数を表 3 に示した。装道の経験者は、3 名（5.8%）、華道の経験者は、3 名（5.8%）であった。本授業以外の日本文化の経験では、体育会系（剣道・柔道・弓道等）の経験者は、8 名（15.4%）、文化系（書道・茶道・日舞等）の経験者は、19 名（36.5%）であった。両方の経験者は、3 名（5.8%）であった。

#### 4) 15 項目の授業前後の平均値の比較

授業前後の 15 項目の平均値の比較（表 2）では、調査項目⑦「看護の実習時、言葉遣いなどに役立つと思う」が 6.15 から 6.13 に授業後が低下したが、他の 14 項目においては授業後が上昇した。その中で授業前より授業後が有意に高かったのは、調査項目①「花の美しさを感じて心が豊かになる」、調査項目③「この授業は看護の実習時、話題作りに役立たない」、調査項目④「花の美しさや立ち振る舞いの美しさに気づくことができ、感性が刺激される」、調査項目⑤「日本の伝統文化に触れて、楽しさ・素晴らしさを次世代の人に伝えていきたい」、調査項目⑥「この授業は生活を豊かにすることに役立つと思う」、調査項目⑩「日本文化（装道・華道）は私たちの生活に役立たない」、調査項目⑫「日本文化（装道・華道）をここで学ぶことにあまり意味はない」、調査項目⑬「この文化を継承することは大事である」、調査項目⑭「人間として視野が広がり成長できる機会となる」、調査項目⑮「国際化

表2 調査項目の授業前後の平均値と標準偏差, 有意確率(n=52)

調査項目	授業前の平均値±標準偏差	授業後の平均値±標準偏差	P
①花の美しさを感じて心が豊かになる	5.06±1.227	5.90±0.774	***
②一般的なマナーを身につけることが大切だと思う	6.63±0.627	6.81±0.525	
③この授業は看護の実習時, 話題作りに役立つ(逆転項目)	5.37±1.39	6.06±1.406	**
④花の美しさや立ち振る舞いの美しさに気づくことができ, 感性が刺激される	4.93±1.075	5.98±0.874	***
⑤日本の伝統文化に触れて, 楽しさ・素晴らしさを次世代の人に伝えていきたい	5.06±1.145	6.06±0.978	***
⑥この授業は生活を豊かにすることに役立つと思う	5.73±0.910	6.10±0.823	*
⑦看護の実習時, 言葉遣いなどに役立つと思う	6.15±0.998	6.13±1.103	
⑧普段の生活の中から礼儀を心がける必要がある	6.42±0.723	6.58±0.637	
⑨看護に必要な心(相手を尊重する)を学ぶことができる	6.04±0.949	6.31±0.781	
⑩日本文化について知らなすぎる	5.06±1.195	5.27±1.430	
⑪日本文化(装道・華道)は私たちの生活に役に立たない(逆転項目)	5.48±1.379	6.21±0.936	**
⑫日本文化(装道・華道)をここで学ぶことにあまり意味はない(逆転項目)	5.77±1.215	6.40±0.721	**
⑬この文化を継承することは大事である	5.87±0.817	6.35±0.861	**
⑭人間として視野が広がり成長できる機会となる	5.94±0.938	6.52±0.727	**
⑮国際化に伴い, 日本文化を学ぶことは役に立つ	6.06±1.056	6.52±0.828	**
15項目全てを合計した平均値	5.57±0.53	6.04±0.50	***

\*p<.05\*\* p<.01\*\*\* p<.001

に伴い, 日本文化を学ぶことは役に立つ」の10項目であった。そして, 15項目全体を合計した平均値においても有意に授業後が高かった。この比較においては, 各項目ごとの度数分布が正規分布を示していないものが多くノンパラメトリック検定であるWilcoxonの符号付き順位検定を実施した。

5) 過去の日本文化の経験の有無による15項目の合計の平均値の比較

授業後の15項目の合計の平均値を日本文化(装道・華道)の経験の有無でグループ化したものを比較し表4に示した。体験有りが5名, 6.16±0.51であった。体験無が47名, 6.03±0.50であり, 経験有りが無より高かったが, 有無によるグループでの有意差はなかった。授業後の15項目の合計の平均値を日本文化(装道・華道以外の経験)の経験の有無によりグループ化したものを比較した(表4)。体験有りが30名, 6.11±0.46であった。体験無が22名, 5.94±0.55であり, 体験有が無より高かったが, 有無によるグループでの有意差はなかった。

表3 日本文化の経験とその期間の度数(n=52)

本授業科目の経験	装道の体験者数(%)	3(5.8)
	華道の体験者数(%)	3(5.8)
本授業科目外の日本文化の経験	体育会系(剣道・柔道・弓道等)の体験者数(%)	8(15.4)
	文化系(書道・茶道・日舞等)の体験者数(%)	19(36.5)
	両方の体験者数(%)	3(5.8)
本授業科目外の日本文化の経験の期間	1年未満(%)	1(1.9)
	1年以上5年未満(%)	9(17.3)
	5年以上10年未満(%)	10(19.2)
	10年以上(%)	8(15.4)
	現在も継続中(%)	2(3.8)

表4 日本文化の経験の有無による15項目の合計の平均値(n=52)

		度数	15項目の合計の平均値±標準偏差
装道・華道の経験	有り	5	6.16±0.51
	無	47	6.03±0.50
日本文化の経験(装道・華道以外の経験)	有り	30	6.11±0.46
	無	22	5.94±0.55



## 6) 自由記述

授業終了後に8名の以下の記述があった。

- (1) 貴重な体験をありがとうございました。②
- (2) 今回のこの講義を受け日本文化を学ぶことができ良かったです。ここで得た学びを看護に生かしたいと思います。
- (3) 装道時間は、最後に書くレポートにどんな内容を書いていいのかがわからなくなるためプリントを準備して下さるとうれしい。授業は1時間(週)でいいと思う。
- (4) 多くのことを学ぶことができ、とても貴重な経験となりました。これらを今後生かしていくことが重要だと思うので、行動に移せるようにしたいです。
- (5) この授業がなかったら日本文化に触れる機会は無かったと思います。この授業が、日本文化の美しさに気づききっかけとなりました。まだまだ授業を受けて、曖昧な箇所を直し習得していきかったです。来年からも続けて欲しいです!
- (6) 日本人らしい慎ましきや奥ゆかしさを学び、改めて日本人としての立ち振る舞いや所作の素晴らしさに気づくことができました。特に浴衣を自分で着つけられるようになったのは、女性としても必要なことだと思う。また、教養のある女性に見られるようになり、社会に出た時に恥をかかないと思うし非常に役に立つと思う。
- (8) 今回、女性と日本文化の講義を通して日本文化についてたくさんの知識を得ることができ、たくさんの動作など身に付けることができました。看護師として働くうえで、大切なことを学ぶことができましたと思います。まだまだ日本文化について知らないことがあると思いますが、この講義は今後も続けてほしいと思いました。

7) 平成30年度の実施状況を図1・2で示す。



図1 装道の授業(まとめ)実施状況



図2 華道の授業状況

## VI 考 察

「女性と日本文化」の授業評価を明確にし今後の課題を検討する。

## 1) 授業の評価

## (1) 授業前後の調査項目の平均値の比較

授業後の平均値は調査項目⑦「看護の実習時、言葉遣いなどに役立つ」以外の14項目は高かった。その中でも調査項目①③④⑤⑥⑪⑫⑬⑭⑮の10項目は、授業後が有意に高く、15項目全てを合計した平均値も授業後が高かった。有意差を示さなかった調査項目は、②⑦⑧⑨⑩であった。装道・華道とそれ以外の日本文化の過去の経験の有無による15項目の合計の平均値を比較すると経験者が高いが、両者に有意差は認めなかった。このため15項目中の10項目・全体の平均値が授業後が高いことは、授業の効果と考える。

授業後に有意差を示さなかった調査項目②「一般的なマナーを身につけることが大切だと思う」、調査項目⑧「普段の生活の中から礼儀を心がける必要がある」については、授業前が高く、この授業の前よりマナー・礼節の大切さを心がけているためであると考え。調査項目⑦「看護の実習時、言葉遣いなどに役立つと思う」は、授業の有無に関わらず大きな影響はなかったと思われる。これは、牛ノ濱等<sup>8)</sup>と同様であった。調査項目⑨「看護に必要な心(相手を尊重する)を学ぶことができる」は、授業前が $6.04 \pm 0.949$ と $6.0$ 以上で高い値を示してはいるが、授業後は $6.31 \pm 0.781$ と大きな上昇を認めなかった。これは、着装・お茶の入れ方・お菓子の食べ方・華の創作という具体的な経験がどのような意味を持つかという抽象のレベルまで行き着かない学生が多かったためであると考え。これは、牛ノ濱等の調査時は有意差をもって授業後が高い<sup>9)</sup>からすると8年経過した

今の学生の状況を示している。このことは自由記載においても「装道時間は、最後に書くレポートにどんな内容を書いていいのかがわからなくなるためプリントを準備して下さい」と記述している。つまり、実際の体験をレポートにする時、自分で再構成し自分の考えを明確にし文字にする過程において、具体的な体験を抽象概念化するという思考が弱くなっている学生がいると考える。調査項目⑩「日本文化について知らなすぎる」に関しては、授業前後で大きな変化がない。これは、過去の装道・華道の経験者が各3名(5.8%)、それ以外の日本文化の経験者が延べ30名(57.7%)、また現在も継続中が2名(3.8%)という経験数や期間から授業により大きな影響が出現しなかったとも考えられる。

## (2) 自由記述による授業評価

52名のうち8名しか自由記述はないが、「貴重な体験」「日本文化を学ぶ」「日本人らしい慎ましさや奥ゆかしさを学び、日本人としての立ち振る舞いや所作の素晴らしさに気づくことができた。」「浴衣を自分で着つけられるようになったのは、女性としても必要なことだと思う。」「教養のある女性に見られる」「看護師として働くうえで、大切なことを学ぶことができた」など概ね授業に関して肯定的な記述であった。

## 2) 到達目標の評価

まず、「1. 一人の人間として生きている過程において、生活をより豊かにできる」という目標を検討する。小倉は生活とは生命の維持存続とそれを高めていく営みをいう。そのためには何よりも物の消費とその前提としての物の生産が必要であり、この観点からすると生活とは物の生産と消費をめぐっての活動であるといえる<sup>10)</sup>と述べている。また、看護が目指す生活行動は、呼吸する、飲食する、排泄する、肢位を定める、移動する、眠る・休息する、体温を保持する、身体の清潔を保つ、危険を避ける、意思を伝達し情動を表現する、生産的な活動をする、楽しみの活動をする、健康について学習するなどを指す<sup>11)</sup>と述べている。その豊かさの定義は、さまざまな価値があり一概に述べることはできないが、A大学の学生は、発達段階からすると青年期で社会経験の少なく保護者の下にいる人々である。これらより学生の生活の捉え方としては、物の生産・消費という活動よりも生命の維持・衣食住等を考えているのではないかと推測すると項目①④⑤⑥⑧⑩⑪が該当し、この項目の平均値を授業前後で比較すると全項目で授業後が有意に高く、目標は到達していると言える。

次に、「2. 美に対する感性を磨くと共に礼節を身につけることができる」という目標を検討する。これは、調査項目②④⑧が該当する。その中で項目④「花の美しさや立ち振る舞いの美しさを感じることができ、感性が刺激される」は有意に授業後が高く、授業により感性が磨かれたと言え、本授業による看護教育への意義は大きいと考える。看護教育に日本文化を取り入れることは感性を磨く視点から有意義であると考えられており、幅広く文化・芸術などに触れることで感性を磨き、豊かな人間性を育むことを目的とした様々な試みがなされている<sup>12) 13) 14)</sup>。これは、看護職が医療分野での知識や看護技術だけでなく、人間を深く理解するための感性の豊かさを求められる職業であるからである。感性は「価値あるものに気付く能動的な働きのある感覚を生み出す能力であり、知性と相互に働き合って知的認識を深めさせる基盤となるもの、自己実現や自己表現に導いていくもの」<sup>15)</sup>と定義されている。今回の調査においては、花の美しさや立ち振る舞いの美しさを視覚を通して感じ、自分で初めて浴衣を着れるようになった・花を生ける、その鑑賞をしながら自分の思い・考えを言葉にするという体験が、価値あるものに気づき自己表現に繋がった。これらの体験が、学生の感性に働きかけ、他者としての人間である対象に対してより深い人間理解につながっていくものと考えられる。谷津は、「看護における専門的観察は、看護に関する系統的知識や諸原理を必要とするばかりでなく、1人の人間として相手の苦悩を分かち合う、相手を同じレベルで感じようとする素朴な接近によって可能になる」<sup>16)</sup>と述べている。感性の教育は人間がより人間らしくなり心豊かになることを育成すること<sup>17)</sup>であり、このことは対象理解に結び付くものである。また、目標2は、「感性と礼節」の2つの内容を包含しており、今後目標の検討も必要である。

最後に、「3. 看護職の基盤となる教養を深める機会となったと感じることができる」という目標を検討する。これは、調査項目②③⑤⑦⑨⑩⑫⑬⑭⑮が該当し、調査項目③⑤⑫⑬⑭⑮の6項目が授業後に有意に高かった。看護教育の大学化に伴い教養の重要性が叫ばれている<sup>18) 19)</sup>。これは、看護の対象は人間でありその対象理解のために看護学の基本的な知識を体系的に理解するとともに、その知識体系の意味を歴史・社会・自然と関連づけて理解することが必要になり、人文科学、社会科学、自然科学および多文化・異文化に関する知識を理解することが求められる<sup>20)</sup>からである。多くの大

学では、1991年の大学設置基準の改正以降、教養教育について様々な課題が論じられてきた<sup>21)</sup>。A大学では、平成17年度より茶道・装道・華道という日本文化を教養豊かな学生の育成を目指して開講し、現在の形に落ち着いている。

それは、初年次教育であり、授業の装道でお客へお茶をふるまう、客として次の客を考えたお菓子の頂き方などの体験は、相手(=他者)への「おもてなし」や「心づかい」の精神を体験することであり他者理解に繋がっていくと考える。高野は、「茶道は、お茶を飲むだけが目的ではありません。お茶を点てる空間にあるすべてのものが、茶道の『おもてなし』や『心づかい』の精神を表します。亭主と客が、その精神を共有することが大切です。客は、その空間のすべてを鑑賞し味わいます。亭主のおもてなしのきもちに応え、その場にふさわしいふるまいをし、感謝を示します。そうすることで亭主と客との気持ちが一つになり、心の交流が生まれるのです。茶道は、手前という作法を中心にさまざまな要素が一つになった、総合芸術といえます。」<sup>22)</sup>と述べている。A大学が日本文化を看護学科の教養の一つとして取り入れたのは、この高野が述べた亭主と客の両者の関係性が、看護がめざす看護者と対象の相互の関係性そのものであるからと考える。

しかし、調査項目⑨「看護に必要な心(相手を尊重する)を学ぶことができる」は、今回の調査では授業後に有意差を認めるほど高くなかった。現在の学生の特徴として自我同一性の確立が未発達であり、自己中心性が高いことを示しているとも考えられる。青年期の発達課題は、アイデンティティ(自我同一性)の確立であり、自分と対峙し自我を確立しつつ社会の一員として他者と協調して生きるという心理・社会的な独立である。高校を卒業後の看護系学士課程学生は、このような発達課題を有すると同時に自分とは異なる発達課題の対象に向き合わざる得ない学習課題があり困難を生み出している<sup>23)</sup>。魚住らは、看護学生を対象とした自我同一性の研究において、その集団が職業を志向していることから、入学時から他学部の得点に比べ自我同一性が高いことを指摘されていた。しかし近年の研究結果をみると、他の学部と同様に自我同一性の獲得が困難な傾向にあり、入学後の支援の重要性が示されている<sup>24)</sup>と述べている。A大学のカリキュラムに日本文化と取り入れた取り組みは、他者(=対象)理解を考えつつ自己対峙する時間・空間を有するとも言え、看護系大学の学士課程にある学生の入学後の支援としても

有効であると考えられる。

また、牛ノ濱等<sup>25)</sup>は、到達目標として「次世代を育む」、「伝統文化を継承する担い手となる」を掲げていた。今回は目標としてそのことを示しておらず、調査項目⑤⑩⑫⑬⑮が伝統文化の学び・継承として適切であり目標の検討が必要である。伝統文化に関する項目は、⑩以外の⑤⑫⑬⑮の4項目は授業後に有意に高かった。

### 3) 今後の課題

授業効果は明確であるが、今回の分析により現代学生の発達課題が未成熟であるため他者理解が困難であり、具体的な体験を抽象化へ導くことも容易ではないことが判明した。そのため講師と相談・連携を密にし、体験が他者理解や抽象化に結びつくような授業の工夫が示唆された。また、目標の検討が必要である。今後、学生が提出した日誌・レポートなどの質的分析を追加し学生の学びを分析し更なる授業効果をはかりたい。

## Ⅶ まとめ

- 1) 「女性と日本文化」の授業の評価を明確にし今後の課題を検することを目的にA大学看護栄養学部看護学科3年生58名に自己記述式質問紙調査を授業前後で2回実施した。
- 2) 調査項目は、牛ノ濱等が作成した講義「女性と日本文化」の効果測定項目(10項目)に筆者が5項目を追加した15項目、過去の日本文化の経験の有無とその期間、授業に対する自由記載であった。
- 3) 調査参加者は52名、回収率89.7%であった。調査項目の授業前後の信頼係数は、=.792, .830と高かった。
- 4) 15項目の平均値の授業前後の比較は、調査項目⑦「看護の実習時、言葉遣いなどに役立つと思う」が授業後が低下したが、他の14項目においては授業後が上昇した。15調査項目中の10項目と15項目全体を合計した平均値が有意に授業後が高かった。日本文化の経験者は、装道・華道とも各3名、他の経験者は30名であり、経験の有無による15調査項目に関しての有意差はなかった。また、自由記述においては授業に対して肯定的な記述が多かった。
- 5) 4)の結果より授業の効果は得られたと考えた。
- 6) 現在の看護系大学の学士課程にある女子大学生は、他者理解が困難、具体的な体験を抽象化へ導くことが容易ではないことが示唆され、これらを考慮した教育の在り方・目標の検討などの課題が明確となった。

## VIII 研究の限界と今後の展望

今回の研究では、58名の学生を対象とした。そのため対象も少なく、結果・考察で述べたことを一般化することは困難である。今後、対象数を増やし、今回の研究成果で示唆されたことを念頭にし、学生の学びが多く深くなるような教育の検討が必要である。

### 謝 辞

調査にご協力いただきました対象者の皆様に心から御礼申し上げます。

### 引用文献

- 1) 文部科学省高等教育局医学教育課平成29年10月31日 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/1397885.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/1397885.htm)(2019/1/6 アクセス)
- 2) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会：看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～ 文部科学省，大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/\\_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf) (2019/1/6 アクセス)
- 3) 佐藤みつ子，入江多津子：本学における看護教育の特徴(1)―看護学科教育課程編成の考え方と特色―，了徳寺大学研究紀要 6,133-140,2012
- 4) 佐藤みつ子，入江多津子：本学における看護教育の特徴(2)―芸術を取り入れた教育の試み―了徳寺大学研究紀要 6,145-150,2012
- 5) 牛ノ濱幸代，山下美穂，平田直美等：講義「女性と日本文化」の効果を測定する項目の検討，鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要 14,17-25,2010
- 6) 前掲書 5)
- 7) 前掲書 5)
- 8) 前掲書 5)
- 9) 前掲書 5)
- 10) 小倉啓宏：看護学大辞典，第4版，メヂカルフレンド社，東京，1998
- 11) 小玉香津子，高崎絹子：看護学概論，第3版，文光堂，東京，2003
- 12) 梶ひとみ，竹内和子，小濱優子：日本伝統音楽の生演奏鑑賞による看護学生への感性教育の効果，川崎市立看護短期大学紀要 19(1),69-75,2014
- 13) 梶原祥子他：文化講演における学生の学習成果と評価，東邦大学医療短期大学紀要 15,60-68,2001
- 14) 杉山喜代子：短歌の鑑賞から看護教育へ，看護教育 6,506-509,2012
- 15) 高橋史朗：感性をどう考えるか，現代のエスプリ 375,32-37, 1997
- 16) 谷津裕子：看護における感性に関する基礎的研究―「看護場面的写真」を鑑賞する看護者の反応の分析―，日本看護科学会誌 19(1),71-82,1999
- 17) 前掲書 3)
- 18) 梅川奈々：看護系大学における職業教育の在り方―経験をとおした省察への支援―，千里金蘭紀要 11,49-56,2014
- 19) クローズ幸子：ナースの品格を育成するために：看護教育者の視点から，日本赤十字看護学会誌 11(2),51-54,2011
- 20) 日本看護系大学協議会：看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標，<http://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf> (2019/1/6 アクセス)
- 21) 岩本晃代：学士課程における「教養教育」の課題に関する考察―教育制度と教育機能との関係を視座にして―，崇城大学紀要 39,27-37,2014
- 22) 高野総太：名作マンガ100 ここがスゴイよ！ニッポンの文化大図鑑，日本図書センター，東京，2018
- 23) 杉森みどり，舟島なをみ：看護教育学，第5版，医学書院，東京，2014
- 24) 魚住郁子，山田紀代美：青年期にある看護学生の自我同一性と仲間関係の検討，日本看護研究学会雑誌 37(5),35-43,2014
- 25) 前掲書 5)

## Examine the evaluation of the class “Women and Japanese Culture”

Mariko Sonoda, Kyoko Muta

Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition,  
Kagoshima Immaculate Heart University

**Key words** : Women and Japanese Culture, lesson’s effectiveness,  
female students in a bachelor’s programme of nursing colleges.

### Abstract

**【Objectives】** Define the evaluation of the class “Women and Japanese Culture” to reflect on the challenges for the future.

**【Method】** The respondents of the surveys were 58 first-year students from the Department of Nursing Science, Faculty of Nutritional Science, A University, and self-descriptive questionnaires were conducted twice, one before and one after the class. The questionnaires included 15 questions; ten effectiveness measurement questions on the lecture “Women and Japanese Culture” compiled by Ushinohama et al., and five additional questions created by the authors. They allowed the respondents to describe freely about the absence or presence of their experience with Japanese culture in the past, the duration of the experience, and their thoughts on the lesson.

**【Findings and observations】** 52 participated in the surveys, and the collection rate was 89.7%. The confidence coefficient on the questions before and after the lesson was high at  $\alpha=.792$  and  $.830$  respectively. In comparing the mean value of each question before and after the lesson, the score for Question 7 “Do you think it is useful during nursing practice or in one’s language?” showed a decline after the lesson, but the values increased after the lesson in the other 14 questions. Among the 15 questions, the combined mean value for Question 10 and 15 was significantly high after the lesson. As to those who had experience in Japanese culture, three respondents professed to have experience in both Sodo and Kado, and 30 respondents noted their experience in other aspects of Japanese culture, indicating that the absence or presence of experience made no significant difference on the 15 questions. There were also many positive comments on the lesson. From these findings, it is believed that the lesson was useful. It is assumed that female university students in a bachelor’s programme of nursing colleges have difficulty in understanding others and that they struggle to abstract their specific experiences, and the challenge to examine the whole concept and objectives of education that considers these difficulties has come into focus.

---